

旅館からの脱却!

旅の目的は体験であり、そのために 宿泊するための施設であることを第一に改革

～田んぼドライブや街歩き、土間クッキング“など旅の過ごし方をHPでTOPに展開～

2019年7月、雪国を代表する新潟・六日町に格式高い宿「温泉御宿 龍言」が従来の“旅館”というスタイルから、地域活性化を目的とした古民家ホテルに転身。その名も世界を視野にとらえて「ryugon」と名付けたのが、県をまたぎ13の宿泊施設が参画している雪国観光圏の代表でもある井口智裕社長だ。なぜ、旅館からホテルという発想に切り替え新たな挑戦に挑んだのか、そしてryugonの魅力などをお聞きした。



ryugon
井口智裕氏
(株)いせん 代表取締役

ryugon
新潟県南魚沼市坂戸 1-6
URL: <https://ryugon.co.jp>

将棋の竜王戦も行なわれる格式高い宿の運営を引き継ぎ、2019年7月、「ryugon」として誕生した。リノベーションを施し、重要文化財とともに外観は和のテイストを維持しつつも一歩館内に足を踏み入れると、そこは外観からは想像できないスタイリッシュな空間が広がる。新潟・六日町は日本で一番雪の積もるエリアでもあり、雪のシーズンはもちろんのこと、スキーや温泉以外にも四季を通じて変化する景色やアクティビティが体験できる地域でもある。

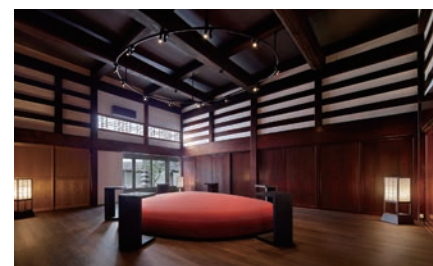
旅館からの脱却を目指した井口智裕社長は「地域活性化のためには従来の旅



館のスタイルからの脱却を図り、地域全体のブランド力を高めていくことが不可欠」という考えから古民家ホテルという発想に至った。

団体客を主軸とした大型旅館は敷地内や館内に遊戯施設や演芸場、食事処などを整え、街をそぞろ歩きすることなく過ごせることをセールストークに運営してきた。大型に限らず多くの旅館は温泉と夕食・朝食の提供など、基本的に到着後は館内で過ごす旅のスタイルを提供している。結果、旅館は大勢の人で賑わっていても、温泉街の飲食店、土産物屋は閑散とし、全国各地の温泉街の活気が失われていった。

この現状から脱却するためには“エスケパリエンス（経験・体験）”が必要で



あると考え、旅の目的は体験であり、そのために宿泊するための施設であることを第一に、地の滋味を味わえる、雪国を感じられることを地域とともに育んでいくことが地域活性化につながるのではと考えた。

ryugonのホームページのトップは客室や施設内の概要ではなく、“過ごし方で選ぶ”と題して、“自然の中で身体



を動かす”“地域の暮らしや文化に触れる”“心と体を整える”“知世・網人との特別な時間”“親しい仲間との思い出づくり”“事業に新たな創造性を”という項目で、それぞれの項目に見合った過ごし方が紹介されている。

例えば“地域暮らしや文化に触れる”では「お昼から贅沢 雪国の食と地酒を巡る夫婦旅」や「魚沼の寺院を訪れて心と体をほぐす」と題してアクティビティプランが紹介されている。“心と体を整える”では「ryugonの山テラスでのんびり周りを気にせずのんびりランチ」が紹介されている。



アクティビティの項目では「田んぼド



ライブ」や「山菜採り・きのこ狩り」、「田舎体験」として果実酒体験、手焼きせんべい、手作り梅酒体験を紹介、そのほか「トレッキング&登山」「まちぶら散歩」「田んぼサイクリング」や「e-bike（イーバイク）」、人気の地元お母さんの指導による「土間クッキング」などが紹介されている。

このように宿泊するための体験を前面に打ち出すことで、宿泊施設に閉じ込めない、エスケパリエンスを通して六日町や周辺地域を楽しんでもらえるよう取り組んでいる。この考えは代表を務める雪国観光圏においても同様に、体験を前面に打ち出すことで雪国ならではの魅力を発信することで日本ならではの田舎文化、雪国文化は海外市場にも響くのではないかと、13の宿泊施設でタッグを組み、EU圏の富裕層を対象にブランディングアップに向けた活動を続けている。「これからは宿泊施設だけが突出するのではなく、地域と共生することで生まれる新しいツーリズムの世界”旅館3.0”の



時代です。まさにこの地域に暮らすように旅をすることをいかにご提供できるかです。また海外の方にもストレスなく旅を楽しんでいただけますようビーガンの方に向けたお食事の提供も不可欠です。これまで雪国はスキーのイメージが強く、またこのエリアは都心より比較的近い距離にあるため日帰り客が多かったですが、エスケパリエンスを通じて何泊でもしていただける宿を地域と共に目指していきたいと思えます」（井口智裕社長）。

